



「半福半X」ってなんだ!?

半分福祉で働きながら、もう半分の顔を持つ施設職員の働き方・生き方



「半福半X」って何!?

福祉施設で働きながら(半分福祉)、一方で自分が実現したい夢、やりたいことに取り組む(半分X)暮らし方を提案する造語。社会福祉法人武蔵野会が一般社団法人ぼくみんと協働し、離島・伊豆大島で障害者施設職員を募集するにあたって、ローカルな離島だからこそ実現できる働き方を提案する「Work in Local×Social」のプロジェクトの軸として、影山裕樹氏(編集者・大正大学表現学部専任講師)が発案しました。その土地にあるものを楽しもう面白がろうとする眼差しは、障がいのある方やご高齢の方々が大切にしてきたものに通じ、その姿勢が福祉を豊かにするという考えを社会提起してきています。この半福半Xという新しい視点を知り、「調布市内でも体现している施設職員はいる!」と、リニューアル号の特集テーマとさせていただきます。「調布の半福半X 現役職員」たちの仕事内容、意外なXと働き方、きっかけ、思いはどのようなものか、ぜひご覧ください!

7名の方に2つの質問をしました!

Q1 半福半Xになった経緯は?

Q2 あなたにとって半福半Xの魅力とは?

Q1

父親の影響で、幼少期から弟と一緒に剣道と居合道を20年間習い、有段者である多田さん。一方で小児脳性麻痺だった兄の療育支援を通して出会う福祉関係者の姿を見て「自分もあんな大人になれたら」と、尊敬の念を抱いていた。パソコン関係の道に進んだ後、知人の紹介で爽々苑の高齢者出張入浴サービスの仕事に約10年従事。忍者活動のきっかけは、忍者を職業とする知人の「忍者婚」に出席した際、一発芸として披露した多田さんの試し斬りが注目を浴び、侍インストラクターにスカウトされたから。週末は観光客相手に侍と忍者に扮して活動するようになり、一時期は独立もしたが、爽々苑に呼ばれて復職。サービス管理責任者やクリーニング師等の資格を取得して、平日は利用者の方たちとクリーニング作業に汗を流している。

多田 尚弘 Naohiro Tada

特定非営利活動法人爽々苑

クリーニング事業をする施設の支援員 × 忍者



伊藤 美麻 Mima Ito

社会福祉法人調布市社会福祉事業団 ゆずのき学童クラブ

インクルーシブな学童クラブ支援員 × バレエ講師

Q1

幼少期からバレエを習い続け、将来も期待されていた伊藤さん。家族から「バレエ一筋より、一度就職をしてみても」とのアドバイスを受け、OLを経験したが、伊藤さんのバレエ愛は変わらず、アシスタントを経て、新宿でバレエスタジオを開いた。その後、狛江市にあるスタジオオーナーとの出会いから、子どものバレエ教室を始めたが、コロナ禍でレッスンを中断。ママ友からの紹介で、障がいのある子とない子が一緒に過ごすインクルーシブな学童クラブの面接を受け、スタッフとして働くようになった。無事に子どものバレエレッスンも再開したことで、学童スタッフとバレエ講師とを両立するようになった。



Q2

学童クラブの仕事をする時、子育て経験があったので不安はなかったのですが、障がいのあるお子さんに対しては未経験でしたし、資格もありませんでした。専門的な知識や対応のケースについては、勤務時間中に研修をしてもらえるので、とてもありがたかったです。バレエ教室にも多様なお子さんがいらっしゃるのでも、対応にはとても役立っています。もうひとつ、よかったと思っているのは、学童クラブで尊敬できる上司に出会えたことです。スタッフの人間関係がとてもよく、この上司と同僚のいる職場で学びながら、ずっと働きたいと思っています。

Q2

福祉の仕事はとてもやりがいがあります。私自身、脳性麻痺の兄を支援する人間性の素晴らしい福祉専門職の方々や職場での仲間を見てきましたが、家庭を持つタイミングで給与を上げるために転職する方もいます。私としては、土日や深夜に重労働のバイトをするより、趣味や得意なことを活かしたら心も豊かになり、また福祉の仕事頑張ることができると思います。もし好きなことで友人に頼まれたら、無償でやってあげると、相手も喜ぶし自分も苦にならないので、若い方はそんなことから「半福半X」を始めてみるとよいかもかもしれません。



廣木 俊文 Toshihumi Hiroki

社会福祉法人調布市社会福祉事業団 富士見町じゃんぷ

グループホーム世話人 × 脚本家

Q1

障がいのある方々が暮らすグループホームで、食事や掃除などの日常生活の支援をしている廣木さんは、脚本家でもある。大学時代は福祉を専門に学んだが、映画サークルで映画の魅力にはまり、卒業後はシナリオ学校に通った。講師だった脚本家の手伝いをしながら 2011年にデビュー。これまで20本近くのドラマや映画などの脚本・構成を手掛けている。とはいえ、脚本を本業にできるプロはごく一部、映画関係者でも兼業をしている人が多い。廣木さんは福祉の勉強をしていたことを活かして世話人の仕事に就き、夜や休日の時間を使って、シナリオを書き続けている。グループホームで培われた「家事力」や様々な経験は、脚本づくりにはもちろん、同じ法人に勤務する妻を支えながら、家庭での家事や子育てにも活かされているという。



Q2

対人関係が中心の世話人と、一人でパソコンに向かって考えながら脚本を書くという、全く別の二つの仕事があることで、頭を切り替えられるのがいいところですね。僕自身の精神安定にもなっていますし、どちらも好きな仕事でやりがいを感じています。利用者の方の感情にどう対応すればよいか、ままならないことも多い仕事と、人の心の動きを言葉に表現していく仕事。どちらにもよい影響があって、振り返りながら日々勉強させてもらっていると感じています。これからは漫画の原作もやっていけたらと、勉強をしているところです。



Q1

深大寺で畳店を営む家に生まれ、畳職人である父親の姿を見て育った小林さん。畳縁（たたみべり）を使ってバッグを制作する母親を手伝いながら、自らも畳縁でオリジナルのポーチや小物などをつくり、店頭で販売するようになった。一方、調布を耕す会のカフェスタッフをしていた大学生の弟さんが、卒業して就職する際、「僕のかわりにカフェに行ってもらえない？」と頼んだことをきっかけに、カフェスタッフとして参加。現在はカフェ以外にも、利用者の方たちが製造するお菓子やジェラートをキッチンカーで移動販売している。



Q1

名古屋で製菓専門学校を卒業後、ケーキ店やレストランなどで働いていた矢野さん。上京したのをきっかけに、専門学校で学んだ砂糖でつくる繊細な伝統工芸菓子「シュガークラフト」の技術を磨きたいと教室へ通い、講師としても活動。ボランティア活動をしている知り合いに声を掛けられ、めじろ作業所のイベントに参加したのを機に「CafeGallery さえずり」でパティシエとして働くようになった。専門学校時代にヘルパー資格を取得するなど、福祉への興味はあったものの、障がいのある人と一緒に働くのは初めての経験。どのようにすればお互いの気持ちが伝わるかを試行錯誤しながら、支援員としてもパティシエとしても10年の経験を積んだ。仕事以外の時間にシュガークラフトの制作を行い、大会では見事受賞している。

Q2

パティシエから福祉の仕事に就いたので、最初は戸惑うことも多かったのですが、めじろ作業所の方が明るく前向きだったことに救われました。カフェではパティシエとしてケーキづくりや聴覚障がいや高次脳機能障がいのある利用者の方たちの支援をしています。シュガークラフト受賞作品を作業所の一室で飾っていただきありがとうございます。シュガークラフトは時間がかかり繊細で慎重な作業のため自分との戦いなのですが、作品づくりに集中する時間と、カフェでみんなと働く時間とのバランスがとれて、楽しく仕事をしています。



矢野 ともみ Tomomi Yano

特定非営利活動法人羽ばたく会 めじろ作業所 CafeGallery さえずり

カフェのパティシエ × シュガークラフト作家



小林 美菜子 Minako Kobayashi

社会福祉法人調布を耕す会 カフェ大好き

カフェのキッチンカー スタッフ

× 畳縁(たたみべり) プロダクトデザイナー

Q2

実家の店頭で、バッグやポーチ、小物など、どのようにディスプレイすれば魅力的に見えるか、購入していただけるかを工夫していたので、キッチンカーやイベント販売で役立っています。施設職員の方たちには「なるほど、そうやってレイアウトするんだ」と、新鮮に見えるみたいです。また、利用者の方がつくるグッズを実家の店頭で販売したり、そのグッズを見た地元の方にイベント出店に誘われるなど、二つの仕事をしていることでの広がりが楽しいです。利用者の方にバッグの留め金加工の軽作業をお願いして、コラボ商品となったバッグもあるんですよ。



宮岡 利世 Riyo Miyaoka

特定非営利活動法人羽ばたく会 めじろ作業所

布製品づくりなどの支援員 × フラダンス講師

Q1

会社勤務を経て、フラダンスの講師をしていたお母様からフラダンスを学び、共に指導をするようになった宮岡さん。月に数回、めじろ作業所の利用者の方たちにフラダンスを教えに通っていたある日、たまたま職員募集のお知らせを知り、採用に至った。調布市の手話講習会を受講していた事もあり、めじろ作業所では聴覚障がいや高次脳機能障がいのある利用者の方たちに手作業や手芸活動の支援をしたり、休憩時にはストレッチや、呼吸を整える運動を行って、健康的な側面からも支援をしている。





松永 希

Nozomi Matsunaga

特定非営利活動法人ひなげしの会 第1ポピーの家

生活支援員 × 歌手



Q1

現役の歌手としてステージに立ちながら、オリジナルアルバムやシングルをリリースしている松永さん。20代の頃、芝居やスタントマンをしていたが、アルバイト先の喫茶店で音楽に出会い自分で曲を作り始めたことから、マスターに紹介されたバンドのボーカルとして活動を開始。ベテランミュージシャンに支えられながら、小笠原諸島に伝わる古謡を歌い継ぐなど、独自の音楽世界で活動をしている。12年前、家庭の事情で歌手活動を一時期休止、新聞の求人を見て応募をしたことから、施設の支援員として人生初の就職を経験。以前からライブで知的障がいの方たちの施設を訪問したり、歌詞も提供していたので、福祉現場には抵抗なく入ることができた。現在、支援員としてフルタイムで働きながら、職場の同僚の理解を得て歌手活動も続けている。

Q2

若い頃から音楽活動を続ける中、時代もありますが、「就職したらクリエイターでなくなる」と思い込んでいましたが、今となっては「もっと早く就職すればよかった!」と痛感しています。もちろん責任もあり、大変なこともあります。ポピーの家はスタッフのほとんどが正職員で、有給休暇をとりやすいという恵まれた職場環境。利用者みなさんからも自由なインスピレーションをもらってシンガーソングライターとしての幅も広がっています。福祉の仕事はやりがいがありメンバーの方たちと過ごす時間は今ではかけがえのないものになっています。若いクリエイターの人には偏見を捨てて「とにかく就職してみてください!」って教えてあげたいですね。

Q2

フラダンスも福祉作業所の仕事も、どちらも自分にとっての挑戦であり、ポジティブな気持ちでやらせていただいています。フラダンスをする中で聴覚障がいのある方との出会いは貴重な体験となり、手話の技術を更に磨きたいと思うきっかけとなりました。実際にフラダンスのハンドモーション(手振り身振り)の表現と、手話の表現は共通点が多く、聴覚障がいのある方にも馴染みやすいと感じています。フラダンスを通して、もっと身体を使う楽しさを知っていただきたいし、前向きでポジティブに幸せに生きていけるよう、お手伝いをしていきたい。それが私のやりがいです。



調布市福祉作業所等連絡会は、調布市内で障害者総合支援法の就労継続支援B型事業所・生活介護等のサービスを実施する事業所（障がいのある人の仕事や活動の場）や、児童福祉法にもとづく放課後等デイサービス事業所（障がいのある子どもの療育と放課後・余暇活動の場）などが加盟している団体です。35団体66事業所が加盟しています。

「わくわ〜く」は、障がいのある幅広い年齢層の人たちが「わくわくしながら働き、暮らせるよう」エールを送りながら、一般市民の方々に福祉を知ってもらいたいと、年2回発行してきた機関誌です。団体内有志が編集委員として参加、テーマや内容などを話し合いながら制作を進めています。今回の25号は、より福祉を楽しく身近に感じていただけたらと願い、斬新なワンテーマのビジュアル誌にリニューアルしましたが、いかがでしたでしょうか？「半福半X」という切り口から、今まで気づかなかった新たな福祉との関わり方や働き方について興味関心を持っていただけたら幸いです。これからも、調布の福祉をクリエイティブに伝えていくことで、地域での「心のバリアフリー」に役立てましたら嬉しく思います。ぜひ、みなさまからのご意見や感想などをお寄せください。

✉ fuku-renraku@tbz.t-com.ne.jp

<https://chofufukurenraku.sakura.ne.jp/>

